

入院療法にも光を

阿 部 亨 (森田療法クリニック)

高良興生院が廃院となり、私が外来森田療法のみを行うようになって7年が経ちます。入院療法の責任者から、外来療法に変わった経験からいうと、入院は定式化された治療システムによって、とりくみ易い利点がある反面、入院者の個と集団状況の変動に全日的に対応し、休日も含めて四六時中気の抜けない苦勞があります。これに対して緊急時の対応はあるにせよ、基本的には診療時間に全エネルギーを集中できる外来診療とは、精神的負担の点で大きな差があることを実感しています。この意味で現在入院療法を行っている方々のご苦勞に対して、敬意を表せずにはいられません。

最近の趨勢としては、外来療法に比重が移り、森田療法家が森田の基本理念をふまえて、技法を工夫してとりくんでいるのが現状です。又生活の発見会や岡本財団による啓蒙活動によっても、目を見張るような普及と成果が上がっています。このように入院によらない森田的指導の隆盛は喜ぶべきことですが、その一方で、入院施設特に個人診療所は徐々に減少し、看護能力の限界もあって、収容能力は全国的にみても僅かです。にもかかわらず、外来では成果を期待できず、切実に入院を必要とし求めている人が存在するのも、厳然たる事実です。

私は森田療法の存続と発展の為には、外来のみならず、それを背後から支えている入院療法を衰退させてはならないと考えます。

そのためにも、資料保存会そのほかの活動によって、入院療法に関心を持ち果敢にとりくむ医師が増えることを期待します。

更に、種々の負担はあるでしょうが、森田本来の姿であり成果を期待できる個人の入院施設を立ち上げる若い気鋭の医師が出てほしいと願うのは、時代離れた夢想でしょうか。